

「その後も帝人君は今日も昨日もこうやってここに来てる。つまりは、君がキスしたことを許してる」

「……そう、なのか？」

「普通、同性にキスされたら避けるんじゃないかな。事故ならともかく、故意なのは明らかだしね。嫌ならすごい拒否反応示して二度と来ないし避けると思うよ」

「そう言われればそうかもしれない。けれど、帝人にはここに来る理由があった。」

「竜ヶ峰は生活がかかっているからここに来てんだ」

「ここに来れば、帝人は少なくとも夕飯には確実に困らない。洗濯もできる。風呂にも入れる。多少、静雄がキスした事実を厭つても、ここに来るだけの価値があったのではないだろうか。」

すると、新羅はもう一度ため息をついた。

「あのさ、静雄。帝人君の給料日はいつなのか知ってるかい？」

「言われて、確か、と静雄は必死に記憶を反芻する。帝人にスパーで声をかけられた日に、バイトの給料日は十日後だと、そう言っていたような気がする。」

そして帝人にキスしたのがそれから一週間後、それからもう数日経過している。つまりは、十日が過ぎた。

「キスした時点で、給料日まであと三日だ。銭湯代とか一週間分浮いてるわけだし、君に会うまでの生活をすれば、十分しのげる日数だよな」

「カツアゲにあつてその残金もぶんどられてるはずだ」

「へえ、そうなんだ」

それは知らなかったな、と新羅は言う。そうだ、と頷いたものの、帝人には数日分まとめて夕食材料費を渡していた事実を告げた。

考えてみれば、静雄がキスした事実を本気で怒って嫌がったなら、その金を返さずに静雄を避けても不思議ではなかった。意に添わないキスをした以上、それくらいされても文句は言えない。慰謝料としては安いくらいだろう。

「それでも帝人君は毎日ここに来て、君と過ごす時間を選んだんだよ。それは一つの答えだと、僕は思うね」

つまりそれは、どういうことなのか。

「帝人君は結構聡い子だし、一度キスされた以上、ここに来続ければ二度目がありえるくらいは覚悟してたんじゃないかな。さすがにこの状況は予想外だろうけど」

肩をすくめ、新羅は未だ眠る帝人へと視線を向ける。つられて、静雄も帝人をみつめた。では、彼は自分にもう一度キスされても構わないと、そんな風に思っていたのだろうか。そう思い、それからふとした疑問が頭をかすめる。

「……ちよつと待て。なんでお前が竜ヶ峰の給料日知ってたんだ？」

「君が仕事で夜遅い日、帝人君がうちに来たことがあつてね。君の好物を知ってるかって聞いたんだよ。その流れでいきさつを聞いた」

つまりそのときに帝人の経済状況を聞き、給料日も聞いたらしい。